

～モデル革新プロジェクト(企業評価編)～

《予兆・変調検知モデル》

日本リスク・データ・バンクは、営業現場が作成する交渉履歴（テキストデータ）を活用して《取引先の予兆・変調》を動的に検知するモデルを構築いたしました

《予兆・変調検知モデル》は、鮮度の高い現場の生の情報を使用することで、財務モデルを上回る高いPIT性（AR値0.8以上、景気動向指数との相関係数0.8程度）を実現しました。

《予兆・変調検知モデル》は、深層学習によるAIモデルで中身はブラックボックスですが、モデルが検知した交渉履歴を一読すれば、現場の状況が手に取るように分かります。

実際の交渉履歴をじっくりと読み込んでいくと、強い危機感におそわれます。

若年化や人員減少をいい訳にして、目をそむけ続けてきた不都合な現実。

この現実にはいったいどう向き合っていけばよいのでしょうか？

◆《格付モデル》の評価が高く、《予兆・変調検知モデル》の評価が低い先
⇒ 財務に現れないリスク事象が語られているのに何の対処もされていない

◆《格付モデル》の評価が低く、《予兆・変調検知モデル》の評価が高い先
⇒ 財務内容に問題があるのに業績等に係るヒアリングが全くされていない

銀行内に残った数少ない《与信のプロ》の力を最大限かつ効率的に活用する取組みが急務です。

《予兆・変調検知モデル》を活用し、審査部等の《与信のプロ》が現場のリスク事象を一元的にモニタリングし、取引先の支援・管理強化や格付の見直し等を指示・指導する。

そんな取組みを通じて組織全体の与信運営力の向上を、圧倒的に効率的な方法で実現する。

「与信が解る」「企業が解る」そんな銀行員が再び現場に溢れかえる日が来ることを願って。

（第二章完）